W・C・フラナガン
小林信彦訳

ちはやふる

奥の細道

小林信彦

C・ラフナガン
林信彦 訳

ちはやふる 奥の細道

新潮社

W・C・フラナガン／小林信彦訳／奥の細道

定価　九八〇円

印刷　昭和五十八年六月十五日
発行　昭和五十八年六月二十日
著者　小林信彦（こばやしのぶひこ）
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社新潮社
162 東京都新宿区矢来町七一　振替東京四―八〇八
電話　業務部03(266)五一一一　編集部(266)五四一一
印刷所　大日本印刷株式会社
製本所　大口製本株式会社

©1983 Nobuhiko Kobayashi, Printed in Japan.
乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

ちはやふる奥の細道 Road to the Deep North 3

作者ノート

装画　河村要助

装幀　平野甲賀

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

奥の細道

ちはやふる

W・C・フラナガン／小林信彦訳

ROAD TO THE DEEP NORTH

by

WILLIAM C. FLANAGAN

Translated by

NOBUHIKO KOBAYASHI

ロード・トゥ・ザ・ディープ・ノース（ちはやふる奥の細道）
W.C.フラナガン　小林信彦訳
© 1983 by William C. Flanagan
Japanese translation rights arranged with Super-Fictional Company, Inc., New York through Onion Press Inc., Tokyo

目次　Contents

序　章　沈黙の音　Sound of Silence　9

第1章　忍者の里　Root of the Poet　20

第2章　人骨野ざらしの旅　A Weather Exposed Skeleton　32

第3章　古池再訪　In Search of Identity　44

第4章　犬公方　A Doggy Tycoon　55

第5章　嵐のまえ　Stormy Weather　67

第6章　鹿島紀行　Road to Kashima　79

第7章　笈の小文　The Record of a Satchel　92

第8章　更科紀行　Road to Sarashina　104

第9章　七日間の不思議　Seven Days' Wonder　116

第10章　夏木立　Coconut Grove　129

第11章　天の河　Milky Way　142

第12章　金銀島　North to Sado　155

第13章　金山地獄　Golden Inferno　168

第14章　かぶとの下の　Under the Helmet　181

第15章　幻　住　The Unreal　194

第16章　業　火　Karma　206

終　章　水くぐるとは　Silence Again　219

「素晴らしい日本野球」「素晴らしい日本文化」という二つのエッセイで日本のごく一部の読者に知られたウィリアム・C・フラナガンをご紹介する。彼はまだ二十代の日本研究家であり、その名を知る一般読者はすくないはずなので、略歴を記しておく。

彼は一九五四年ブルックリンに生れた。ニューヨーク大学映画科大学院卒。卒業製作は「小津安二郎作品に見られる芭蕉的ハイミー」である。専攻は日本映画史。NYの東宝インターナショナルの仕事を手伝うかたわら、ジャパン・ソサエティのプログラム・ディレクターであり、日本ブームのおりから、地方大学での講義にも忙殺されている。日本からNYを訪れる映画監督の接待係りでもあり、日本文化研究家として若手ナンバーワンを自任している。

とはいうものの、彼のエッセイには〈思いちがい〉が多く、かつて、その一つを慶大教授・池井優氏に指摘されたが、めげる様子はまったく見られなかった。また、彼は、一九八〇年に〈日本を訪問した〉と称しているが、にわかには信じがたいふしがある。このたびは、〈松尾芭蕉の人間像に迫ってみる〉のだそうで、これが邦訳にあたいするかどうか大いに迷ったのだが、いまや、SFの中にさえバショーが登場する（テッド・レイノルズの"Ker-plop"）時代ゆえ、なにかの参考までにと、紹介することにした。なお、〈原注〉は誤りがあってもそのまま訳し、あまりにもわけのわからぬ個所等には訳注を付した。誤りが判然としているものは、そのままにしておき、英語の〈俳句〉には拙訳をそえた。

訳　者

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

序章　沈黙（サウンド・オブ・サイレンス）の音

ハイクが世界的なポピュラリティーを獲得したげんざいでも、なお、ハイクは日本で発生したものではない、という説をなす者がいる。

映画や野球においてそうであったように、ロシア人が、ここで、しゃしゃり出てくるのは当然であろう。『ウクライナ歳時記』の巻頭において、ロシアきっての俳句学者セルゲイ・ポポフ教授は、「俳句はロシアの母なる大地から生れた」と主張している。「もちろん、日本には、日本の俳句があったであろう。しかし、ロシアには独自の……」といった例の論法で、一六二三年に〈シベリアの俳聖〉ことニコライ・サモワールの詠んだ次の句を、〈世界の俳句の出発点〉とし、〈民衆俳句の原点〉とたたえている。

Glorious winter—
Myriads of crystal flowers,
The sound of silence.
（輝ける冬のしじまやクリスタル）

ここで、ポポフ教授の論を駁（ばく）するのはひかえたい。なぜなら、ポポフ教授は、反逆罪で、すでにシベリアに送られ、充分に冬の華（クリスタル・フラワー）を眺めているはずだからである。

ロシア人の場合は驚くべきことではない。私が驚いたのは、俳句はハワイで発生したという説である。ロッキー浅川編の『カメハメハ歳時記』には、俳句の発生を――奇しくも――同じ一六二三年の漂民（センベーという名の日本人）にみる説が記してある。センベーの句は次のようなものである。

波乗りに板子とられて貰い板　（原文　ローマ字）

日本語を日本人よりも解する私からみると、この句は、殆ど意味不明であり、価値があるとは思えない。また、この句は、いちおう夏の部に入っているが、ハワイに春夏秋冬があるだろうか。（げんみつにいえば、あるに決っているのだが、それでは、ハワイの観光局がPRしているイメージにそぐわないのではないか。）

『ハワイの俳句』のアネット・シェーファー・モロウ女史は、いちおう、句を春夏秋冬に分けた上で、冬の部で、次のように詠んでいる。〈原注1〉

Is this winter here?
Where the snows, bare trees of home:
White sand; driftwood; me.

（ここ冬か白砂流木遊ぶわれ）

こうなると、当然、俳句はアメリカ本土で発生したという説も出てくるわけで、ダラス発祥説とイリノイ発祥説が争っているのである。

しかしながら、これは無理というものであろう。書店へ行って『手軽な俳句の作り方』『一週間で俳句をマスターする本』『古池の作り方』『俳句におけるウエストコースト派』『シブミとセブミ』といった本を求めれば、日本の俳句とアメリカの俳句がいかにちがう

〈原注1〉"Haiku of Hawaii" by Annette Schaefer Morrow (Charles E. Tuttle Company)

か、また、日本の俳句がどのような歴史をもっているか（なにしろアメリカ合衆国よりも古いのだ）が、どの本にも記してある。したがって、このように初歩的な、入門書的なことは、私の論考では、いっさい、とりあげないことにする。

おどろくべきことだが、日本の俳句人口は約一千万人である。モンタナ州ほどの面積に一億二千万の人間がひしめいており、その一割が俳句を作るのだ。俳句雑誌は有名無名とりまぜて七、八百種にのぼるといわれる。すなわち、俳句は日本人の生活そのものであり、5―7―5のジャパニーズ・シラブルズは、日本人の呼吸、生活リズムなのである。

日本人は、日本的でないもの、のみ込みにくいものを、すべて日本風にしてしまう。たとえば、ドン・ブラッシンゲーム（南海ホークス一九六七～六九、のち阪神タイガース監督、南海ホークス監督を経て帰国）の名は、日本では〈ブレイザー！〉と五文字に変えられている。これは、その方が発音し易い、とか、日本人にとって親しみ易い、といった、信じがたい理由からなのである。日本の古いスポーツ紙に〈ブレイザー今日はどこまで打つのやら〉という俳句（訳注・？）がのっていたが、もしも、ブレイザーがブラッシンゲームの名に固執したとしたら、この俳句は成立せず、彼は〈悪いガイジン〉と呼ばれ、排斥されたにちがいない。固執しなかった彼は当時二割七分を打ち、日本人に愛されたガイジンであった。

喜びであれ、悲しみであれ、日本人が神秘的な無表情の底で、なにごとかを感じたとき、それは、5―7―5の俳句リズムになるのである。時として、それは、同胞に対する呼びかけともなる。

一九四五年夏に日本が太平洋戦争に敗れ、大衆が飢えに苦しんでいたとき、焼け跡のあ

ちこちに、次のようなスローガンが、白ペンキで書かれた。

Hey, hungry frog!
Never give up!
Issa is here!
(痩蛙負けるな一茶これにあり)

これがはるかむかしに作られた句だ、といったことは、このさい、無視してよいのである。日本人の大半は、このスローガンによって、ホウレン草を食べたポパイのように立ち上り、奇蹟的な経済復興をなし遂げた。俳句にはこうしたパワーもあるのだ。〈原注2〉

しかしながら、私の考えるところでは、俳句の本質は、このようなところにはない。それは、異常とも思えるほどの、日本人特有のキセツカンと、より密接な関係を持っているように思われる。

ああ、キセツカン！　おかげで、われわれガイジンは不思議の国に迷い込んでしまうのだ。——たとえば、富士山に登るために、厚いセーターをデパートに買いに行ったとしよう。もしそれが、夏のまえの長雨のころであれば、入手は殆ど不可能である。「アリマセン」「九月ニナレバ……」といった、そつのない微笑につつまれた、つめたい返事が売り子からかえってくるだけだ。厚いセーターやスエードのコートを夏に入手するのは、日本ではまず絶望的と知るべきだろう。(奇妙にも、八月上旬を過ぎると、水着のたぐいは一隅に片づけられ、なぜか英国製の厚いジャケットを着て、パイプを片手にした男のマネキンが飾られる。)

季節の変化のはげしさにおいて、東京にまさるとも劣らぬニューヨークに住む人間が、

〈原注2〉当時、東京の焼け跡のコンクリートには、この俳句と、カドマン(ホリディ・インのような日本のホテルチェーン)の名が殴り書きされていた。カドマンの荒々しい宣伝法は、民放ラジオ、テレビがなかった一九四〇年代の東京では画期的なものであった。

このようにキセツカンに敏感だとはとても思えない。日本人が過敏なのである。たとえば、次の句をみてみよう。

Eating Oysters,
The bell sounds,
Of Horyuji Temple.

（かき喰えば鐘が鳴るなり法隆寺）

これを単純に解すれば、〈牡蠣を食べていたら法隆寺の鐘が鳴った。ああ、今年も、もう、Rのつく月の季節になったのだなあ！〉というだけのことである。

しかし、この句の真の味わいを理解するためには、法隆寺が日本でもっとも古い寺であり、そこで聖徳太子（プリンス・ショートク）が一万円札や千円札を造ったこと、そのために太子はすばらしい宝物殿を持つにいたったこと、そして、それらは伝説となり、いまでは殆ど人が訪れなくなっていること、――また、この寺に近い伊勢湾でケンニンジ牡蠣（がき）という世界一うまい牡蠣がとれ（訳注・建仁寺垣の誤解か）、客寄せのために寺がオイスター・バーを経営している、といった知識を持っていなければならない。日本史上の栄光と現世の食欲とが衝突することによって、人間の悲しみが浮き彫りにされるのである。（オイスター・バーといっても、グランド・セントラル・ステーションのそれの広さを想像してはならない。町角のピザ屋ほどの茶店（ティー・ハウス）である。）

日本人にとって、これらの知識は、知識と表現するのが不適当なまでに血肉化している。だから、ある秋の一日、ひとりの日本人が鐘の音を耳にした瞬間から、彼の知覚はセイコーのデジタル時計のように正確に作動して、右の句（5―7―5）を脳裡によみがえらせ

る。句がよみがえると同時に、鐘の音はサンスイのステレオに近い音でもう一度、彼の心に鳴りひびき、タバスコを落としたケンニンジ牡蠣の色がパナソニック・カラーテレビの鮮明さで浮んでくる、というしだいである。

ステレオのそれに近い鐘の音が消えたあとも、彼の耳には、なおも、一つの音が響きつづけている。それは、俳句が大切にする沈黙の音——無の世界である。そして、これこそはハイミー（訳注・俳味ならん）と称されて、日本人がとりわけ珍重するものなのだ。

かりに〈ハイミー〉なる語をきいたこと、読んだことがないアメリカ人でも、俳句にいささかの興味を抱いているならば、〈古池や〉（オールド・ポンド）の作者の名はご存じのはずである。みずから芭蕉（バナナ・プラント）と名乗る謎の男——彼こそは、俳句界のゴッドファーザーであり、首領（ドン）であり、あるときは松下幸之助なのであった。

松尾芭蕉（一六四四～一六九四）は生前のみならず、死後三百年に近い今日まで、日本の、いや世界中の俳句界に君臨している。げんざい残されている彼の肖像画は、窶（やつ）れたピーター・ユスティノフのようなものと、中年のハンフリー・ボガートに似たものとがあるが、私は、芭蕉の生き方は、ハードボイルド映画のボガートに通ずるものがあるように思う。（こまかくは、追って、立証する。）読者はとりあえず、芭蕉＝ボガートが扮したサム・スペード、というイメージを抱いていただきたい。（訳注・サム・スペードは、ダシール・ハメットのハードボイルド推理小説の主人公で、抜け目のない私立探偵。彼がなぜ芭蕉に似ているのか、訳者にはわからない。）

The old pond;
A frog jumps in,—

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com